

ホンモノと触れ合う 熊本県立装飾古墳館の博物館活動

1 はじめに： 装飾古墳館と「ホンモノの学び」

熊本県立装飾古墳館は、熊本県北部の山鹿市に位置し、装飾古墳をテーマとする全国でも珍しい考古系博物館です。装飾古墳とは、古墳の石室や岩壁に線刻、浮彫、あるいは彩色で文様を施した古墳時代のお墓のことです。特に熊本県には約200基が集中し、全国の4分の1を占めています。これらの装飾文様は、古代の人々の精神性や美的感覚を今に伝える、歴史的・文化的・芸術的価値の高い文化遺産です。



熊本県山鹿市 チブサン古墳 6世紀

当館は平成4年の開館以来、これらの文化財の保存・研究に加え、子供たちや地域の人々が「古代」と出会い、深く考えるきっかけをつくる博物館活動を展開してきました。その中心となるのが、「古代体験教室」です。これは、単なる体験活動に留まらず、発掘調査の成果や出土品から得られた「ホンモノ」の情報を基に、学芸員と参加者が一緒に「古代人の心」に迫る学びの場として継続しています。

2 体験活動の始まりと設計思想

当館の古代体験教室は、学校週5日制の導入に伴う、

土曜日の子供たちへの質の高い学習機会提供の必要性から始まりました。当時の学芸課スタッフは、「見る・触れる・体験する」を三本柱とした体験活動を企画し、当館ならではの特色を出すべく知恵を絞りました。その設計における重要なファクターとして、以下の3点を重視しました。

- ①「装飾古墳」：地域の主要な文化遺産を体験の核とする。
- ②「地域との連携」：博物館活動を地域社会の中に位置づける。
- ③「楽しむ」：参加者が主体的に関わり、興味関心を深める。

これらのファクターを柱に据えて体験メニューとするため、当時、新米の学芸員であった私を含む開館時のスタッフで試行錯誤を繰り返し、「古代絵画教室」「赤米づくり」「勾玉づくり」といった独自の古代体験学習の形を整えていきました。これらの活動は、単に「古代のモノを作る」ことに終始せず、「古代人の思考や生活を追体験する」という一貫した設計思想に基づいています。この追体験こそが、参加者にとって、本物の歴史への入り口となるからです。

3 特色ある体験活動の実践と工夫

(1)「装飾古墳」と古代絵画教室

当館には、原寸大の装飾古墳レプリカが12基展示されており、学芸員の解説とともに見学することで、「ホンモノ」の古墳に触れ合う疑似体験を提供しています。こ

れを核とした「古代絵画教室」では、当時の装飾古墳に使われていたものと同じ材質の石材をキャンバスに用い、学芸員自らが復元した阿蘇黄土から作るベンガラなどの「ホンモノ」の顔料を使用しています。

開館以来 30 年を超える長きにわたり継続しているこの体験は、館内のみならず、兵庫県立考古博物館の大中遺跡祭り、鳥取県立むき



古代絵画教室 制作風景

ばんだ史跡公園のむきばんだフェスタ、2018年には台湾の十三行博物館などでも実施され、装飾古墳の魅力を広く伝えています。参加者は、復元した古代の顔料を使って、当時と同じ材質の石版に「ホンモノ」の装飾文様を描くことで、古代人の高い技術力と、赤や黒などで彩られた文様に込めた特別な意味について、深く思いを馳せることになります。

(2) 「地域連携」と赤米づくり体験の進化

当館が所在する菊池川流域は、弥生時代から稲作で栄えた歴史ある地域です。この地域において、地元で栽培を始めていた「赤米」を体験活動に取り入れました。当時、「赤米生産グループ」の協力により水田の確保が実現し、当館は地域と協働で活動を開始しました。



水田での田植えの様子

この体験をできる限り古代に近づけるため、田植えでは買頭衣を着て素足で手植えすること、収穫では緑泥片岩の石材から作った「ホンモノ」の石包丁を使って穂首刈りを行うことにこだわりました。これは、ただ古代の道具を使うだけでなく、古代の労働と食への感謝を体感するための重要な工夫です。

近年、生産者の高齢化により水田の維持が困難になったため、現在は「バケツ稲」栽培へと形を変えながらも継続しています。令和7年度からは、石包丁に代わり、鳥取県青谷上寺地遺跡から出土したものを参考に復元した「木包丁」を収穫に使うなど、常に最新の考古学的知見を取り入れ、「ホンモノ」にこだわった体験を続けています。活動の形態が変わっても、「地域で古代を学ぶ」という根本的な目標は堅持しています。



バケツ稲の栽培風景



木包丁を使った穂首刈り

(3) 「楽しむ」の具現化:勾玉づくりの全国展開

勾玉づくりは現在、多くの博物館で実施されていますが、当館でも開館当初から人気の高い体験です。当初は学芸員が原石を手作業で加工していましたが、参加者の増加と遠方からの依頼に対応するため、準備方法を進化させました。



滑石を削って勾玉づくり

「砥石」を「紙やすり」に変え、石材も特注の「勾玉用石材」へと発展させました。この紙やすりを用いた「勾玉作製キット」は、やがて教育用機材として全国に広まりました。

これは、当館が「ホンモノの学び」の普及を目的として、試行錯誤の末に生み出した教育ツールのイノベーションと言えます。この体験は、現在も当館の活動の柱として、子供たちにもものづくりの楽しさと古代の造形美を伝えていきます。

4

学校・地域との連携が生み出す
学びの深化

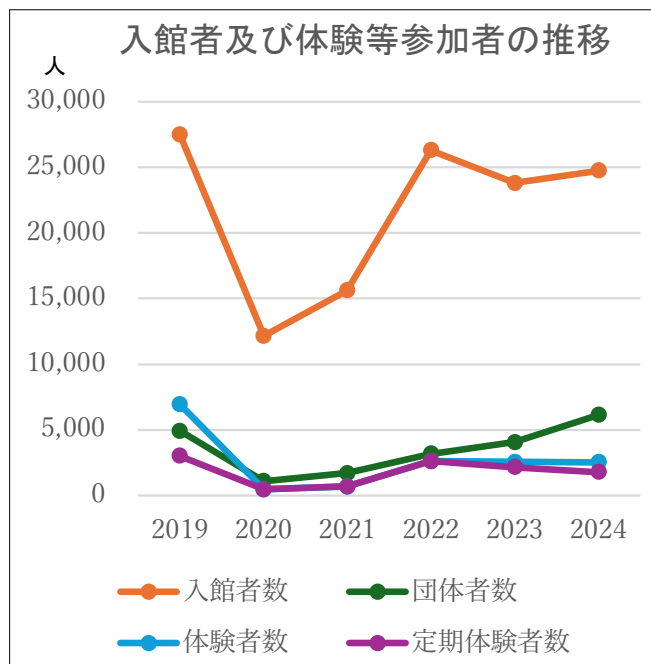
当館は、県内外の小学校の社会科見学、修学旅行などの見学及び体験活動の受入れ、地元にある小学校、中学校、高等学校との「赤米づくり」による博学連携を積極的に行っています。

右のグラフと表は令和元年度（2019年度）から令和6年度（2024年度）にかけての入館者と団体入館者数及び体験活動の参加者数の推移をグラフ化したものです。年間を通して多くの団体が訪れており、その中で体験学習を目的にする団体は令和6年度（2024年度）で4割を超えています。令和2年度（2020年度）から令和3年度（2021年度）は新型コロナウイルス拡大の影響により、入館者が大きく減じることとなり、併せて体験活動も制限せざるを得ない状況になりました。しかしながら、新型コロナウイルス防止対策の5類移行後は、入館者と体験参加者も回復傾向にあります。

当館に訪れる団体の傾向については、令和6年度のデータから見ると、体験活動を期待する団体が4割を越えていることから、当館を利用するにあたり体験活動を期待していることが読み取れます。

(1) 体感を通じた深い歴史理解

年度	入館者数	団体者数	体験者数	定期体験者数
2019	27,507	4,937	6,952	3,006
2020	12,169	1,087	478	478
2021	15,628	1,701	674	674
2022	26,322	3,182	2,615	2,615
2023	23,801	4,078	2,561	2,149
2024	24,761	6,137	2,535	1,781



上 表 入館者数の推移 下 入館者及び体験参加者の推移

一方、見学対応では、来館する団体と事前に打合せを行い、児童生徒の目的にあった解説を行っています。特に、古墳館が管理する国史跡岩原古墳群の屋外見学では「ホンモノ」の古墳を前に、古代の人々が古墳築造にかけたエネルギーを体感することが出来ます。その後、館内の装飾古墳室に展示している実物大の石室レプリカを見学することで、教科書の挿絵では得られない実感を伴った理解が生まれます。これは単に展示解説を聞くだけでなく、実際の古墳の大きさや土の重み、石室内の空気といった五感で得る情報が、古代の人々の営みを立体的に捉えることを可能にします。この「体感」こそが、知識を単なる暗記で終わらせず、生きた歴史として心に残す鍵となります。

(2) 農と食の歴史に触れる博学連携

「赤米づくり」では、地元の小学校、中学校、高等学校の児童、生徒と「赤米づくり」体験を行っています。田植えから収穫まで参加した子供たちからは、「赤米づくりの大変さを知ったことで、ご飯を大切にしようと思った」などの深い感想が寄せられています。

この活動は、古代の稲作技術に触れるだけでなく、食

育やサステナビリティ（持続可能性）といった現代的なテーマにもつながっています。実際に土に触れ、作物を育てる過程を通じて、子供たちは農業の基幹である「水稲耕作」への理解関心を深め、地域の自然や文化の担い手としての意識を芽生えさせています。大切な取り組みとして博学連携の推進に努力しています。

(3) 「再現」から「共感」へ

このように、体験の中で大切にしているのは、「再現すること」よりも「感じ取ること」です。古代絵画教室では、古代人がなぜ赤い顔料を選び、どんな気持ちで文様を描いたのかを考えながら作業します。赤が持つ生命力や呪術的な意味、限られた色材の中で表現しようとした古代人の切実な想いに想像を巡らせます。

こうした「想像を通じた共感」が、歴史を生きたものとして捉えるきっかけになるのです。参加者は、当時の制約や環境を共有することで、古代人と時を超えた対話を試み、その結果、文化財を単なる「モノ」ではなく、受け継ぐべき「想い」として捉えるようになります。

5

おわりに： 地域文化の継承と博物館の使命

装飾古墳館は、単に資料を展示する場所ではなく、「地域の文化を伝え、未来につなぐ学びの場」としての役割を担っています。体験教室の運営は、学芸員のみならず館に勤務する全ての職員、地域住民からの協力と支援によって成り立っています。特に、長年赤米づくりを支えてくださった地域生産者の皆さんは、古代の知恵と現代の農業技術をつなぐ貴重な語り部となっていていただきました。こうした活動が地域の文化財を守り、次世代へ引き継ぐ大きな力となっています。

(1) 地域社会における博物館のハブ機能

当館は、年間を通じて「古墳館へ5・5・GO!」や「ナ

イトミュージアム」などのイベントも開催し、子供から大人まで楽しみながら古代文化に親しめる機会を提供しています。

「ナイトミュージアム」では、夜の静寂の中でライトアップされた当館の幻想的な風景を楽しみながら、装飾古墳の石室レプリカを見学することで、古代の神秘的な世界観を深く体感することができます。こうした時間や視点を変える工夫は、従来の博物館のイメージを脱却し、新しい魅力にあふれる「文化交流のハブ」としての機能強化につながっていくはずです。これらの体験活動の積み重ねが、文化財を「みんなのもの」として守る意識につながっていくことだと考えています。

(2) 未来へつなぐ「ホンモノとの出会い」

私たち博物館職員が大切にしているのは、「ホンモノと出会う感動を伝えること」です。石版や顔料などに触れながら、千数百年前の人々が残した装飾文様の数々を体感することで、何よりも強い学びの原動力になります。この感動は、子供たちが将来、郷土の歴史や文化を大切にする市民意識の醸成へと結びつきます。

今年に入り、ヨーロッパ美術史・考古学会で日本の「装飾古墳」の研究報告会がポルトガルのリスボン市で開催されました。今後は、装飾古墳が持つ普遍的な価値を国内外に発信する役割も当館は担っていくことでしょう。

これからも熊本県立装飾古墳館は、学校や地域、そして子供たちと共に歩みながら、考古学的な知見と地域に根差した体験を融合させ、「学びと文化をつなぐ場」としての使命を、時代に合わせて進化させながら果たしていきます。

問合せ先

熊本県立装飾古墳館

電話 0968-36-2151

ホームページ <http://kofunkan.pref.kumamoto.jp>